

「家に帰る」だけではなく、そもそも「入院しない」という選択も
『退院支援』の次のキーワードは？

佐藤 美子

「病院の時代は終わった」「本人が居心地のいい場所であること」「暮らし・人生を遮断しない医療」――。

退院支援の伝道師・宇都宮さんのお話は、患者・家族の立場にある者の一人として200%腑に落ちることばかりです。患者全員の思いを言葉にして、医療現場で訴え続けてこられていることに、深く敬意と感謝を表します。

医療報道に携わる者としては、今回、「退院支援と退院調整は違う」「外来で暮らしぶりを考える」という点で特に新たな気づきをいただきました。

これまで記事を書く際、退院前調整会議とか退院支援とか特に違いを気にせずに使ってきました。何度か会議の場面を取材しましたが、関係者それぞれが自分の資料を読み上げるだけで特に質疑はなし、そもそも病院のお医者さんは退院後の患者の生活に関心あるのかしらと感じるような、残念な状況も目にします。

退院支援と事務的な退院調整は別物であること、退院支援とは患者の意思決定支援であることを明確に説明することで、記事でも退院支援の重要性を伝えやすくなると思います。

医師中心主義である医療の在り方、看護師が中心である退院支援の仕組みとのズレにも問題の根っこがあるのかとも感じています。

さらに進んで、「外来で暮らしぶりを考える」というのには驚きました。講義の冒頭で示された事例でも、気付いて行動されたのは外来の看護師さんでしたね。「家に帰る」だけではなく、そもそも「入院しない」選択をできれば、日常の暮らしを続けられるという意味では患者にとって理想的です。

退院支援という言葉には、「病院から在宅へ」というスローガンのようなニュアンスがあります。象徴的ないい言葉だと思っています。

ただし、現実の取り組みはそこにとどまらず、主戦場は外来を含めた医療へと広がりつつあるのですね。

退院支援を超えた次のキーワードは、在宅療養支援なのか、はたまた何か新しい言葉が生み出せるか、考えます。